

本との出会いを楽しむ 第13回

「シーシュポスの神話」との出会い

農学生命科学部准教授 赤田 辰治



大学への道すがらふと歩調を緩め、自分は一体何を急いでいるのかと思ったことがあります。ちょうどその頃に出会ったこの本の主題は不条理の考察です。カミュは“l'absurde”（不条理、ばかばかしい）という言葉に特別の意味を持たせていて、ここでは「人が世の中を理解しようと強く希求しているのに対し、世界は全くの無関心であり峻厳であるという、孤独な個人と冷酷な世界が対峙している状態」をさしているそうです。つまり、人生に苦難はつきものですが、現代人は神にすぎること主義主張を強制されることもなく、自由に考えることがゆるされておられ、それだけにかえってどのように生きるべきかという問題に直面していることと無関係ではないと思われま

す。不条理精神を追求した先人として、ニーチェの哲学やドストエフスキーの文学などが紹介され、過去の偉大な精神が異なる言葉と芸術で不条理を表現してきたことがわかります。しかしながらその高名な人たちでさえも、最後まで不条理にとどまることはありませんでした。そして彼らはいかに超人や神の存在に光明を求めるわけですが、それは不条理の人間のひたすら謙虚に実直に自分の知力で世界を理解しようという決意からみれば逃避であると断じなければなりません。

では、不条理に生きることは難しいのでしょうか？カミュは『異邦人』の死刑囚の明日なき身と

同様に、不条理の人間は有限の人生のなかで未来の希望にしばられることなく、今をあますところなく汲み尽くすことを欲することによって、現時点における精神的自由と生への強い情熱を持つに至ると説いています。本の題名にあるシーシュポスは神話に出て来る不敵な神ですが、重い罰を背負わされ、毎日重い石を転がして高い山の上まで押し上げなければなりません。押し上げた石が転がり落ちるとまた同じことの繰り返しです。そのような暮らしの中で唯一のやすらぎは転がり落ちる石を追いかけて山を下るそのすがすがしいひと時にしかないのですが、その全てをよしとする姿が描写されています。

カミュの精神は小説『異邦人』と『ペスト』で大きな成功を納め、『反抗の人間』では不条理精神の連帯を提唱して社会的反響を呼びましたが、サルトルとの論戦ではあまり形勢が芳しくなかったとされています。しかしながら勝敗が問題ではありません。遺稿になった『最初の人間』では、名も知れぬ先祖の末裔として生まれ、何の遺産もなく、ごく貧しい家庭に育った名もない“最初の人間”カミュの少年時代は、厳しい生活の中にもそれゆえにこそ周りの人々との狂おしいばかりの愛情と友情に溢れていたのだということを知りました。私のようにごく平凡な人生を送ってきたもつけども、この不条理の原点には強く共感しています。

(あかだ しんじ)

赤田先生がご紹介いただいた「シーシュポスの神話」は、本館で所蔵しておりますが、現在本館工事中のため利用できません。工事終了後、ご利用できます。

所在：本館旧書庫 3～5 層 請求記号：958/C14/2 図書 I D：05834591